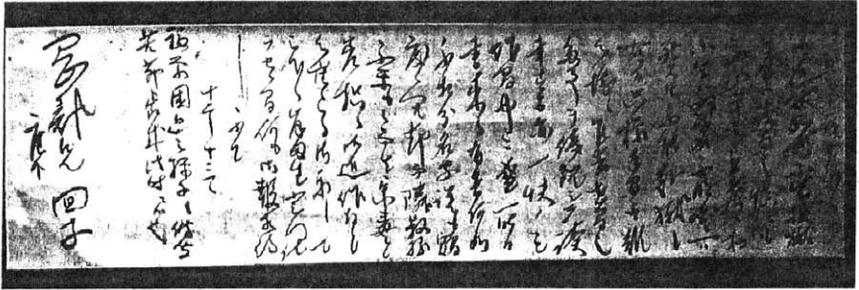


豊中市の服部天神宮に保管されていた吉田松陰の手紙



門下生へのいたわりにじむ

幕末の武士で教育者の吉田松陰が、NHKで放送中の大河ドラマ「花燃ゆ」で注目を集める中、豊中市の服部天神宮が保管する未公開の松陰の手紙が脚光を浴びている。松陰が斬首刑に処せられる前年の安政5(1858)年に、松下村塾の門下生に宛てたとみられる内容で、尊皇攘夷派の志士が弾圧された安政の大獄が吹き荒れ、長州藩から入獄を言い渡された渦中にも、門下生への配慮を忘れた文盲が記されている。(川西健士郎)

豊中の神社に保管 松陰の手紙脚光



吉田松陰の肖像画 (萩博物館提供)

■投獄言い渡され

手紙は、10歳年下の門下生・岡部富太郎宛てで、日付は安政5年12月13日付。松陰が安政の大獄による弾圧で処刑される、およそ1年前にあたる。手紙を解読した萩博物館

(山口県萩市)の道迫真吾 致し方ないと考えている。学芸員によると、この手紙が、何の罪で投獄されるのの8日前に松陰は長州藩から投獄を言い渡されていた。たまたま死んでも牢獄に行くつもりはない。

手紙の前半には、次のように書かれている。御近状如何、小生投獄ニては諸友之懐も

不止事と被考候所、小生ハ罪名不明白候ヘハ死ストモ不能却獄候

(大意)近況はいかがでしょうか。私が投獄を命じられ、諸友(門下生)が塾を執らせ、反対派を弾圧した安政の大獄が始まる。

大老・井伊直弼は同年9月、老中・岡部詮勝に指揮を執らせ、反対派を弾圧した安政の大獄が始まる。

これに対し、水戸藩などが直弼の襲撃を計画していることを知った松陰は、同年11月、同志17人と経勝の襲撃を計画する。富太郎も同志の一人だ。

そして12月5日、長州藩にとつて危険極まりない存在となった松陰に投獄が命じられた。ただ、手紙の時点では、松陰は自宅謹慎中だったとみられる。

富太郎ら門下生は、その罪名を問うため藩の上役の屋敷に押しかけたが、城下を騒がせた罪で謹慎を命じられた。

■「人柄示す史料」

手紙は実は、富太郎に「名字説」について説いた文書を別に書き送ったことを伝えるのが本来の要件だった。名字説とは、松陰が門下生一人一人の個性を洞察した上で与えた呼び名の「名」と、ふさわしい精進の方向性も込めたあだ名の

「字」を意味する。入獄を命じられても、門下生への教育的な配慮を続ける松陰の姿勢がうかがえる。

手紙には、さらに2行の追伸がある。福原困迫の様子も伝聞、苦節養成此時候也

「福原」は別の同志。福原又四郎とみられる様子も伝え聞いている。苦しい時であるので養生すべしだ。

「福原」は別の同志。福原又四郎とみられる様子も伝え聞いている。苦しい時であるので養生すべしだ。

筆跡鑑定した京都女子大の母利美和教授(日本近世史)は手紙の文面について「同じ志をもって字んでいる」といふ松陰と門下生の関係性が見えて興味深い。松

陰の人柄をよく表わした貴重な史料だ」と評する。服部天神宮の加藤芳哉宮司(56)によると、手紙は祖父の鏡次郎氏が神社で保管し、「吉田松陰」と書かれた筒に大切に収められていたという。

鏡次郎氏の息子で、生田神社名誉宮司であり、神戸女子大名普教授でもある加藤隆久氏(80)は「父は戦後の疲弊の中で『教育を大切にしなければならん』と強く思っていました。吉田松陰の手紙は、松下村塾に関心をもち、塾を訪れた山口県の人から譲り受けたのでは」と推測している。



トピックス

おまたか